

水の週間実行委員会会長賞（優秀賞）

水の日からつながる世界

北海道

北海道教育大学附属函館中学校

三年

伊東 心風

地震で停電になり、私の生活は一変しました。水が飲めない、お風呂に入れない、トイレの水も流せない。水がないことで生活が一気に成り立たなくなることを実感し、失って初めて、水がどれほど大切なものなのかを強く実感しました。私たちの日常生活には、当たり前のように清潔な水があり、意識することなく蛇口をひねり、水を流したままにすることさえあります。しかし、安全で清潔な水が得られることは決して当たり前のことではありません。

私はこの出来事をきっかけに、水について調べてみることにしました。そして、「水の日」について初めて知りました。「水の日」は、八月一日に水の大切さを考え、節水や水環境を守る意識を高めるための日です。なぜ八月一日なのか、はじめは疑問に思いましたが、暑さが厳しく、水の消費量が最も多くなる時期だからこそ、水の重要性が身にしみて感じられるのだと思いました。

また、八月は終戦日がある月でもあり、毎年この時期には平和や歴史について考える機会があります。私は、現在の日本では蛇口をひねれば当たり前に出てくる水が、戦時下ではどうだったのだろうと疑問に感じました。元兵士たちによる戦争の証言を取り上げたテレビ番組では、喉の乾きに耐えられなくなった兵士たちが田んぼや道ばたの泥水を口にしてしまい、コレラや赤痢がまん延し、亡くなる人もいたそうです。十分な水分を得られないまま猛暑の中を歩き続けることの過酷さは、想像を絶するものだと思います。

さらに調べてみると、世界には安全な水を飲めないことで命を落とす子どもがいます。ユニセフによると、二〇二四年時点で、二十一億人が安全に管理された飲み水を利用できず、一億六百万人は未処理の地表水に頼っているといわれています。また、水はきれいなだけでは十分ではなく、安全が保障されていることが大切です。しかし、多くの地域では

水を手に入れるために、子どもたちが遠くまで水をくみに行かなければなりません。現在、三百三十万人の子どもが水をくみしており、毎日長い時間を水くみに費やしています。中には、一日に八時間かかる場合があります。そのため学校に通う時間がなくなってしまうです。私はこの問題を知り、水が当たり前に使えることのありがたさと、水の安全が守られる社会の必要性を強く感じました。

私は今、テストのたびに募金をする決めてしています。それは、自分の努力が世界の誰かを救うことにつながると考えることで、自分の頑張る力も高められるからです。ユニセフは、水が手に入らない地域の人々に水を届ける活動を行っています。募金することで、ユニセフを通して支援が届けられ、安全な水が人々の命を今日も繋いでいきます。

みなさんは八月一日「水の日」をどのように過ごすでしょうか。私は、同世代の人たちにも「水の日」を知ってもらい、水について考え、共に行動する日にしていきたいです。そして、一見つながりが見えにくい「戦争」と「水」を結びつけて考えることで、世界中の誰もが安全な水を使い続けられる平和な世界を守っていききたいです。

世界には安全な水がない厳しい環境で暮らす子どもたちがいます。安全な水が得られないために人々がどれほど苦しい思いをしているのかを考えれば、私たちの行動も変わるのではないかと思います。少額の募金や少しの節水でも、積み重なれば多くの命を支える力になります。すぐに成果が見えるわけではありませんが、できることを続けていきたいです。そして、「水の日」が水のありがたみに気付き、一人でも多くの人が行動を見直す日になるよう願っています。私は、これからも募金活動を続けるとともに、支援の輪を広げられる大人になりたいです。